

の諸士協力以てその遺稿の編纂に當り、ルネッサンス史概説、世界史論講の二書は既に世に出で我學界に大なる貢獻をなす所あるは人の知る所である。今や本書上梓さるゝに及び博士の名聲を以て益々高からしめるものと言ふべきである。

本書は博士が生前京都帝國大學文學部史學科に於て四年間に亘つて連続講ぜられし所のもの、編纂されしもの、講ぜられしは四年間とは云へ、宛く博士生涯の研鑽、思索の結晶なりと言つても誤少き推察と信ずる。本書に於て、著者は、勿論そのマイトル自ら示す如く、獨逸に於ける歴史哲學の理論的展開を試みたるは言ふ迄もない、全篇四篇中の第一篇即ちヘルデル、カント、フイヒテ及びヘーゲル等の歴史哲學を對象とせる所に特にその感深くせしめるものがある。併し、ニーブール、ランケを取扱へる第二篇、ドロイゼン、シイベルを顧みたる第三篇トライチケ、モムゼンを研究せる第四篇等に於ては、各歴史家の史學理論を究明せるは勿論なれど、そこにては、著者の研究對象は單に史學理論のみではなくして、却て其れ等の歴史家の全人格であると思はしめるのである。こゝに、第二篇以下に於て、第一篇に於ける理論的開展形式とは異なつた、ヒオカラフイッシュユな形式の見られる所以が存すると考へる。著者に於ては、歴史理論を知ると共に、否それ以上に、歴史家を知ることがより關心事ではなかつたか。本書を繕く者も亦この意味に於て讀まればならぬであらう。——未だ通讀すら致せざる紹介者の淺き理解の上のこれ等の言、或は著者の意に合せざる所あ

らんことを恐る。とまれ近來その類少き名著たるは言を俟たざる所、讀者の熟讀翫味して反省の一助とし、體驗内容の増大の資とされんことを望む（菊版五五六頁、岩波書店發行、定價金參圓五拾錢）（井上）

### ●滿蒙合璧清内府一統輿地祕圖

奉天故宮所藏鈔圖四十一張影印、四拾五圓

### ●乾隆十三排銅版中國圖

北平故宮博物館所藏鈔圖百四張玉版宣紙影印、百五拾圓

最近の彙文堂の冊府に右の二つ、何れも故宮所藏の一統輿地祕圖の影印本が出版されたことを報告した、この兩圖は實に支那の地圖として今日までに出來たもの、最優秀なものである、胡文忠の大清一統輿圖は實にこれらの祕圖を原本として出來たものである、この種の輿圖が北京又は奉天の宮城にあることは餘程早く知られ、狩野、小川兩先生は之を明治年間に彼土で見られた、筆者が大正十三年九月北京に遊んだとき、小川教授は是非これをさがしてこいと命ぜられたが、北京の圖書館、歴史博物館いづれを訪れてもいつも無しと考へられた、そこで松浦嘉三郎君にゆつくりさがして貰ふことを托して歸朝したが、果してそれが奉天にもあれば、北平の故宮にもあつたのである。そこで滿洲の金梁氏がまづ前者を出版した、不幸にしてこの方は滿洲文字で記されてゐるところが多く、且つ枚数が少い、所が後

に北平の故宮博物館から出版された方は紙数は二倍以上で、全部漢字で記入されてゐるので、読み易くもあり乾隆の御題までのつてゐるから恐らくこの後の方が一般の需要を呼ぶことであらうと考へる、しかしよく見るとこの兩者は共に乾隆帝が、康熙帝の作らした内府一統圖を増補したもので、その圖の大さといひ、プロセクションといひ寸分の差がない。しかし兩者の間に少差があつてその製作に前後あることは後述する通りであるこの圖の來歴に關し金梁氏曰く

内府一統輿圖世傳二本、一康熙年製、一乾隆年製、則胡文忠大臣一統圖所自出、海內外視同至寶、銅版久毀、求者雖千金不易得也、是圖滿蒙合鑿銅刻至精、內地各省均注漢文、而邊境必注滿文、板藏盛京大內、其珍秘可知、自康熙至今從未見、有傳本邵停書目所記西北秘圖似即指此、然此實一統全圖、東西包舉、非專詳邊境、特邊地滿名注列獨詳尤可寶。到今就故宮籌主博物館、檢出便覽并印製流傳。攷輿地者、得此人間未見之本、足得康熙二圖并重而珍秘且出其上矣

と、いかにも人間未見の地圖である、恐らく乾隆帝が圖して之を盛京に置かれたものであらう、同時に全部漢字で地名をしるした一本を北京宮城にも作り藏したと見えて、この後者が出版された。この方は乾隆の御題があつて圖の來歴をのべてある、大意をのべると、輿地圖は康熙年間、聖祖が人に命じて作らしめ銅版とした、乾隆の世になつて同二十年乙亥準噶爾(天山北路)以西諸郡を平定し、西域ごとく版章に入つた、そこで

何國宗等に命じ西洋人を率ひ西北兩路から分進し、各鄂拓克に至り、測量星度、占候節氣、詳詢其山川險易道路遠近、繪圖一如舊制とある、即乾隆丙子夏六月(一七五〇)に一度地圖が出来た。やがて同二十四年回部悉く版籍を入れた、そこで明安圖等に命じてその部分を増補し、それが庚辰秋八月に出来て、さきの圖に加へた、この事も右の御題の次に再題されて、漢滿兩方の文字で記されてゐる。かくてこの北平の圖は乾隆庚辰(一七六〇年)に大成した。この事は大清一統輿圖の序にも出てゐる、その最初康熙帝の時に出来た地圖については、石田幹之助氏の「歐人の支那研究」に紹介された通り、當時支那に来てゐた宣教師の手によつたもので雷思孝 *Reis* の努力最も著しかった千七百八年七月四日康熙帝の命をうけ *Reis*, *Fantoux*, *Bowvet* の三人が萬里長城を測給したのが最初で翌年 *Reis*, *Fantoux*, *Bowvet* の三神父は遼東方面を測量、同年冬直隸省を測定し、翌年六月に終了、ついで黒龍江方面に及び千七百十一年 *Reis*, *Cartoso* の二人が山東、翌年 *Cartoso*, *Tartre* 二人は山西、陝西、江西、廣東、廣西に及び *De Mailla*, *Heunder* の二人は河南、江南、浙江、福建を分擔し *Reis* は雲南に入り *Friedelle* の助力を得て貴州、湖廣を測給し、千七百十六年、これらの神父は北京に集合し各省別圖と支那總圖を奉つた、これ實に支那ではじめて天文を測量し、プロセクションの考で輿地圖を作つた最初のものである。これらの神父についてはデュアルド一七三五年の支那誌に詳述されてゐるが、それと同時にグンザイル

は、附圖の刻版をひきうけたが、やがて一七三七年に和蘭のミユールレルエルから「支那新圖」といふ名で地圖のみが單行本となつて世に出た、その内容は石田幹之助氏の「歐人の支那研究」に詳述される通で、宣教師等の實測圖を、巴里に送つたによつて著作されたものである。其原圖は、今も佛國外務省古文書館に藏されてゐるといふことである。

今こゝに新に出版された故宮所藏の兩圖は實に右の宣教師の奉つた康熙年製の内府一統圖に更に乾隆の時代に丙子に補刻し庚辰に更に補刻したもの、跡を窺ふに足るもので、ゲンザイルの圖よりも、その表出面積はひろくなつてゐる。愉快なことは盛京故宮の原本は乾隆丙子の作であり、北平故宮の原本は乾隆庚辰の作であるといふことで、兩圖の間に若干の差のあることである。即ち一方は支那圖としても四十一張しかないし、一方の北平の方は百四張にも達してゐることによつても明であるが、盛京故宮所藏本の方は、西三十九度特穆爾圖渾爾即今のイシハルに達し天山北路(準噶爾)を地圖にしてゐるが、天山南路は全くブランクである。しかるに北平故宮の地圖は西は天山南路即回部を圖にしたのみでなく、西五十一度のサマルカンドまでも記してゐる。然るに前者はさうした部分が全く白紙であることによつて、何國宗の時の作であることを證し、同時に後者が明安圖の時の地圖であることをつづげるからである。

盛京故宮圖は四十一枚(五十三厘×七十七厘)の模造紙であり北平故宮圖は百四枚(四十六厘四×六十五厘四)の白紙で大小の

差があるけれども、それは紙の裁方で内部のプロセクシオンは殆ど同大で、一緯度八厘にちかひことは兩圖共にひとしい。

大清一統圖はすべて毎方二百里の經緯の外に斜の經線をひくが、本圖はさうした方格圖ではなく、梯形プロセクシオンである。今北平故宮圖の示す所をみると、北京を中度とし東三十五度、西八十二度に達し、南は北緯十八度から北は八十度に至るもので、緯線一度は全部凡八十耗の間隙のある並行線、經線一度の幅は北緯十八度で、凡七十三耗。北緯八十度で十二耗の狭さに縮めてあつて全部直線である。かうした圖法では中度から左右に離れる程歪みがつよくなる。しかし支那本部附近北緯四十五度から北十八度、東六度の山東海角から西二十度の黄河々源地域までの間は、やゝ正しい地形になりうるのである。従つて北平故宮所藏圖の如く北緯五十度以北の部分、東經十度以東の部分、西域二十度以西の部分に至つては全く歪みがつよい。之を盛京故宮圖の如く北緯五十五度以南、西經三十九度附近にとゞめ、回部をはじめ不明の地はブランクにした方が、却つて信用される度が高いと云つてよいであらう。

盛京圖版は海岸や湖水に陰影があり、山脉のとき克明にその脈絡をしろし、水系も細く、且地名については□印○印●點等苟もしてないといふ特色があつて、餘程西洋地圖學者の技巧を示すといへる。

之に反して北平故宮圖は乾隆庚辰以後の作であつたと見え、盛京圖版のブランクをすべて明にした特色があるけれども、例

令ば湖南城步縣南の苗、又は貴州烏下江の苗地のことく、其地圖の不明なところは、明に境界をしるしてアランクにした所を、これは又あまり地名も地形も變化せず、そのまゝに境を取り去つて胡麻化したり、浙江、江蘇の圖幅に於ても、盛京故宮本は水系が尋常であるけれども、北京故宮本は明代の地圖の跡に從つて太い水系を入れて支那化してゐるといふ缺點がある。よく見ると●點や○點のある地點を略し、地名のみを列記してゐる。蓋し之を盛京版に比較すれば儘に一歩退歩の跡が明かである。大體支那の地圖はいつでも初發がよい。賈耽、朱思本すべてひし乾隆庚辰間、即北平故宮圖に至つてやゝ見劣りがする。その後の胡文忠の大清一統圖によると更にプロセクシヨンの上に見劣りが生じ、地名も粗末になる。これは支那學者の缺點であるが、さうしたことを知るために、この同じ時代の兩圖が出たことは喜ばしい、不幸にしてより良き盛京故宮圖は、價格が安い。しかし滿洲字が多いから讀みにくい缺點がある。けれども之を大清一統圖又は北平故宮所藏本に比較して見れば大方は讀める。但し大清一統圖は後年の作であるから地名に缺點が多い。従つて乾隆十三排一統圖は座右に置かれねばならない。十三排とは一枚の大圖を十三段に横にきつたといふことである。いづれにしても支那で西洋流に測量をしたままつた地圖は乾隆以後今日に至つてまだ存在しないのであるから、支那學の上に本圖の須要なるは言を俟たないのである。

序に云ふがこの兩圖には混同江(黒龍江)の江口に庫額烏即樺太島をしるしてゐるので、樺太の島の發見は間宮林蔵以前にあるといふ人もある。しかしこの兩圖の樺太は、蛸蚪状をなしてゐて、間宮林蔵が記した樺太程に正しく記されてゐないのでなく、蝦夷も日本もない。朝鮮の形も歪んでゐるのであるからこの圖によつて間宮林蔵の探檢の功を没却することは出来ぬ。このことは小川教授が明治四十二年八月の地學雜誌に述べられた通りである。(藤田元春)

●Lor-lan, China, Indien und Rom im Lichte der

Ausgaben am Lohmor.

Albert Hermann

著者 A. Hermann 氏は古代中央亞細亞を經て行はれた支那羅馬間等の絹貿易に關する研究を以て知られた史家である。従つて本書は、勿論かの Sven Hedin 氏に依つて一九〇〇年羅布淖爾の旁に發見せられた二千年前の古市樓閣の歴史を、其地に發掘せられた多數の遺物古文書を資料として述べたものではあるが、然し單に古代支那の守備市たりし樓閣の歴史ではない。寧ろその重點は廣く東トルキスタンの文化史的地位、此の地を經て行はれた東西交渉の状態等に就いて迄も深い史的考察を與へるにある様に見えるのであつて、本書を通讀すれば容易に、著者が China, Indien und Rom im Lichte der Ausgaben am Lohmor. なる副題を附してゐる所以も理解し得られる。尤も本書の目的が元來通俗一般的にあつたが爲に、立論上史料の